

メーレストロムの旋渦

A DESCENT INTO THE MAELSTROM

エドガー・アラン・ポー Edgar Allan Poe

青空文庫

自然における神の道は、摂理におけると同様に、われら人間の道と異なっている。また、われらの造る模型は、広大深玄であって測り知れない神の業わざにはどうていかなわなない。まったく神の業は、デモクリタスの井戸よりも深い。

ジヨオゼフ・グランヴィール

私たちはそのとき峨々^{がが}としてそびえ立つ岩の頂上にたどりついた。四、五分のあいだ老人はへとへとに疲れきつて口もきけないようであった。

「まだそんなに古いことではありません」と、彼はとうとう話しだした。「そのころでしたら、末の息子と同じくらいにらくらくと、この道をご案内できたのですがね。それが三年ほど前に私は、どんな人間も遭つたことのないような——たどえ遭つたにしても、生き残つてそれを話すことなんぞはともできないような——恐ろしい目に遭つて、そのときの六時間の死ぬような恐ろしさのために、体も心もすっかり参つてしまったものでしてね。あなたは私をずいぶん老人だと思つていらつしやる——が、ほんとうはそうじゃないのですよ。たつた一日もたたないうちに、真つ黒だった髪の毛がこんなに白くなり、手足の力もなくなつて、神経が弱つてしまいました。だからいまでは、ほんのちよいと化した仕事にも体がぶるぶる震え、ものの影にもおびえるような有様です。こんな小さい崖^{がけ}から見下ろしても眩暈^{めまい}がするんですからね」

その「小さい崖」の縁に、彼は体の重みの半分以上も突き出るくらい無頓着^{むとんじゃく}に身を投げだして休んでいて、ただ片肘^{かたひじ}をそのなめらかな崖ぎわにかけて落ちないようにしてい

るだけなのであるが、——この「小さい崖」というのは、なんのさえぎるものもない、切り立った、黒く光っている岩の絶壁であつて、私たちの下にある重なりあつた岩の群れから、ざつと千五、六百フィートもそびえ立っているのである。どんなことがあるかと、私などはその崖の端から六ヤード以内のところへ入る気がしなかつたらう。実際、私は同行者のこの危険この上ない姿勢にまつたく度胆どぎもを抜かれてしまい、地上にびつたりと腹這はらばいになつて、身のまわりの灌木かんぼくにしがみついたまま、上を向いて空を仰ぐ元氣さえなかつた。——また吹きすさぶ風のために山が根から崩れそうだという考えを振りおとそうと一所懸命に努めたが、それがなかなかできないのであつた。どうか考えなおして坐すわつて遠くを眺ながめるだけの勇氣を出すまでには、だいぶ時間がかかつた。

「そんな弱い心持は、追つぱらつてしまわねばなりませんね」と案内者が言つた。「さつき申しましたあの出来事の場合全体がいちばんよく見渡せるようにと思つて、あなたをここへお連れしてきたので——ちようど眼めの下にその場所を見ながら、一部始終のお話をしようというのですから」

「私たちはいま」と彼はその特徴である詳しい話しぶりで話をつづけた、——「私たちはいま、ノルウエーの海岸に接して——北緯六十八度——広大なノルドランド州の——淋さびし

いロフオーデン地方にいます。いまそのてっぺんに坐っているこの山は、ヘルゼツゲン、雲の山です。さあ、もう少し伸びあがってください、——眩暈がするようでしたら草につかまって——そう、そんなふうに——そうして、帯のようになっていく霧の向うの、海の方をご覧なさい」

私は眩暈がしそうになりながらも見た。すると広々した大洋が見える。その水の色はインクのように黒いので、私の頭にはすぐヌビアの地理学者の書いた *Mare Tenebrarum* (一) についての記述が思い出された。これ以上に痛ましくも荒寥とした展望は、どんな人間の想像でも決して思い浮べることができない。右を見ても左を見ても眼のとどくかぎり、恐ろしいくらいに黒い突き出た絶壁が、この世界の城壁のように長くつらなっている。その絶壁の陰鬱な感じは、永遠に咆哮し号叫しながら、それにぶつかって白いもの凄い波頭を高くあげている寄波のために、いつそう強くされているばかりであった。私たちがその頂上に坐っている岬にちょうど向きあつて、五、六マイルほど離れた沖に、荒れ果てた小島が見えた。もつとはつきり言えば、果てしのない波濤の彼方に、それにとり囲まれてその位置が見分けられた。それから約二マイルばかり陸に近いところに、それより小さな島がもう一つあつた。岩石で恐ろしくごつごつした不毛な島で、一群の黒い岩がそ

の周囲に点々として散在している。

海の様子は、この遠い方の島と海岸とのあいだのところでは、なにかしらひどく並々でないところがあつた。このとき疾風が非常に強く陸の方へ向つて吹いていたので、遠くの沖合の二本マストの帆船が二つの縮帆部リーフをちぢめた縦帆トライセールを張つて停船（2）し、しかもなお、その全船体をしきりに波間に没入していたが、その島と海岸とのあいだだけは、規則的な波のうねりらしいものがぜんぜんなく、ただ、あらゆる方向に——風に向つた方にもその他の方向と同じように——海水が短く、急速に、怒つたように、逆にほとぼしつているだけであつた。泡は岩のすぐ近いところのほかにはほとんど見えない。

「あの遠い方の島は」と老人はまた話しはじめた。「ノルウェー人がヴァールと言つています。真ん中の島はモスケーです。それから一マイル北の方にあるのはアンバーレン。向うにあるのはイスレーゼン、ホットホルム、ケイルドヘルム、スアルヴェン、ブツクホルム。もっと遠くの——モスケーとヴァールとのあいだには——オツテルホルムとフリーメーンとサンドフレーゼンと、ストツクホルムとがあります。これはみんなほんとうの地名なんです———といったいどうしてこういちいち名をつける必要があつたのかということ、あなたにも私にもわからないことです。そら、なにか聞えませんか？ 水の様子になにか

変ったことがあるのがわかりませんか？」

私たちはヘルゼッゲンの頂上にもう十分ばかりいた。ここへ来るにはロフオーデンの奥の方からやってきたので、途中では海がちつとも見えなくて、絶頂に来て初めて海がぼつと眼の前に展開したのである。老人がそう言ったときに、私はアメリカの大草原プレアリーにおける野牛の大群の咆哮のようなだんだんと高まってゆく騒々しい物音に気がついた。と同時にまた、眼の下に見えていた船乗りたちのいわゆる狂い波（3）が、急速に東の方へ流れる潮流に変わりつつあることに気がついた。みるみるうちに、この潮流はすさまじく速くなつた。刻一刻と速さを増し——せつかちな激しさを加えた。五分もたつと、ヴァルーまでの海は一面に抑えきれぬ狂瀾きよらん怒濤んどとうをまき上げた。が、怒濤のいちばんひどく猛り狂つているのはモスケーと海岸とのあいだであった。そこではひろびろとたたえている海水が、裂けて割れて無数の衝突しあう水路になつたかと思うと、たちまち狂おしく瘞けいれん撃し、——高まり、湧わきたち、ざわめき、——巨大な無数の渦うずとなつて旋回し、まっさかさまに落下する急流のほかにはどこにも見られぬような速さで、渦巻きながら、突進しながら、東の方へ流れてゆく。

それからさらに四、五分たつと、この光景にまた一つの根本的な変化が起つた。海面は

一般にいくらか穏やかになり、渦巻は一つ一つ消えて、不思議な泡の縞しまがそのままにならなかつたところにあらわれるようになったのだ。この縞はしまいにはずすと遠くの方までひろがってゆき、互いに結びあつて、いったん鎮しずまった渦巻の旋回運動をふたたび始め、さらに巨大な渦巻の萌芽ほうがを形づくろうとしていているようであつた。とつぜん——まったくつぜんに——これがはつきり定まった形をとり、直径一マイル以上もある円をなした。その渦巻の縁は、白く光つてゐる飛沫しぶきの幅の広い帯となつてゐる。しかしその飛沫の一滴さえもこの恐ろしい漏斗じょうごの口のなかへ落ちこまない。その漏斗の内側は、眼のとどくかぎり、なめらかな、きらきら輝いてゐる黒玉こくぎよくのように黒い水の壁であつて、水平線にたいてして約四十五度の角度で傾斜し、揺らぎながら恐ろしい速さで目まぐるしくぐるぐるまわり、なかば号叫し、なかば咆哮し、かのナイヤガラの**大瀑布**だいばくふが天に向つてあげる苦悶くもんの声さえかなわないような、すさまじい声を風に向つてあげてゐるのだ。

山はその根からうち震え、岩は揺れた。私はびつたりとひれ伏して、神経の激動のあまり少しばかりの草にしがみついた。

「これこそ」と、私はやつと老人に言った、——「これこそ、あのメールストロム（4）の大渦巻なんですね」

「ときには、そうも言いますが」と彼は言った。「私どもノルウェー人は、あの真ん中にあるモスケー島の名をとって、モスケー・ストロムと言っております」

この渦巻についての普通の記述は、いま眼の前に見たこの光景にたいして、少しも私に前もって覚悟させてくれなかった。ヨナス・ラムス（5）の記述はおそらくどれよりもいちばん詳しいものではあるうが、この光景の雄大さ、あるいは恐ろしさ——あるいは見る者の度胆を抜くこの奇観の心を奪うような感じ——のちよつとした概念をも伝えることができない。私はこの著者がどんな地点から、またどんな時刻に、この渦巻を見たのかは知らない。が、それはヘルゼツゲンの頂上からでもなく、また嵐あらしの吹いているあいだでもなかったにちがいない。しかし彼の記述のなかには、その光景の印象を伝えるにはたいへん効果は弱いが、その詳しい点で引用してもよい数節がある。

彼はこう書いている。「ロフオーデンとモスケーとのあいだにおいては、水深三十五尋ひろないし四十尋なり。されど他の側においては、ヴェル（ヴァルー）に向いてこの深さはしだいに減り、船舶の航行に不便にして、静穏な天候のおりにもしばしば岩がん礁しょうのために難破するの危険あり。満潮時には潮流は猛烈なる速度をもってロフオーデンとモスケーとのあいだを陸に向って奔流す。されどその激烈なる退潮時の咆哮にいたりては、もつとも

恐ろしき轟々たる大瀑布も及ぶところにあらず、——その響きは数リーグの遠きに達す。しかしてその渦巻すなわち凹みは広くかつ深くして、もし船舶にしてその吸引力圏内に入るときは、かならず吸いこまれ海底に運び去られて岩礁に打ちくだかれ、水力衰うるに及び、その破片ふたたび水面に投げ出されるなり。しかれども、かく平穩なる間隙は潮の干満の交代時に、しかも天候静穩の日に見るのみにして、十五分間継続するにすぎず、その猛威はふたたびしだいに加わる。潮流もつとも猛烈にして暴風によってさらにその狂暴を加うるときは、一ノルウエー・マイル以内に入ること危険なり。この圏内に入らざるうちにそれにたいして警戒するところなかりしたため、端艇、快走船、船舶など多く海底に運び去られたり。同様に鯨群のこの潮流の近くに來たり、その激烈なる水勢に巻きこまるること少なからず、逃れんとするむなしき努力のなかに叫喚し、怒号するさまは筆の及ぶところにあらず。かつて一頭の熊口フオーデンよりモスケーに泳ぎわたらんとして潮流に巻きこまれて押し流され、そのもの凄く咆哮する声は遠く岸にも聞えたるほどなりき。樅、松などの大なる幹、潮流に呑まれたるのちふたたび浮び上がるや、はなはだしく折れ砕けてあたかもそが上に剛毛を生ぜるがごとく見ゆ。こは明らかに、渦巻の底の巖々たる岩石より成り、そのあいだにこれらの木材のあちこちと旋転することを示すものなり。この潮

流は海水の干満によりて支配せらる、——すなわち常に六時間ごとに高潮となり落潮となる。一六四五年、四旬齋前第二日曜の早朝、その怒号狂瀾ことにはげしく、ために海辺なる家屋の石材すら地に崩落せり」

水深については、どうして渦巻のすぐ近くでこういうことが確かめられたか私にはわからぬ。この「四十尋」というのは、モスケーかあるいはロフオーデンかどちらかの岸に近い、海峡の一部分にだけあてはまることにちがいない。モスケー・ストロムの中心の深さはもつと大したものにちががなく、この事実のなによりの証拠は、ヘルゼツゲンの頂の岩上からこの渦巻の深淵しんえんをななめに一見するだけで十分である。この高峰から眼下の咆哮する phlegethon (6) を見下ろしながら、私は鯨や熊の話をも信じがたい事からのように書いてあるかの善良なヨナス・ラムス先生の単純さに微笑せずにはいらなかった。というのは、現存の最大の戦闘艦でさえ、この恐ろしい吸引力のおよぶ範囲内に来れば、一片の羽毛が台風に吹きまくられるようになるの抵抗もできずに、たちまちその姿をなくしてしまうことは、実にわかりきったことに思われたからである。

この現象を説明しようとした記述は、そのなかのある部分は、読んでいるときには十分もつともらしく思われたようだったが——いまではひどく異なった不満足なものになった。

一般に信じられていた考えでは、この渦巻は、フェロー諸島（7）のあいだにある三つの、これより小さな渦巻と同様に、「その原因、満潮および干潮にさいして漲落する波濤が岩石および暗礁の稜に激して互いに衝突するためにほかならず、海水はその岩石暗礁にせきとめられて瀑布のごとく急下す、かくて潮の上ること高ければその落下はますます深かるべく、これらの当然の結果として旋渦すなわち渦巻を生じ、その巨大なる吸引力はより小なる実験によりても十分知るを得べし」というのである。以上は『大英百科全書』のしるすところである。キルヘル（8）やその他の人々は、メールストロムの海峡の中心には、地球を貫いてどこか非常に遠いところ——以前はボスニア湾（9）がかなり断定的に挙げられた——へ出ている深淵がある、と想像している。この意見は、本来はなんの根拠もないものではあるが、目のあたり眺めたときには私の想像力がすぐなるほどと思つたものであつた。そしてそれを案内者に話すと、彼は、このことはノルウェー人のほとんどみながいだいている見方ではあるが、自分はそう思つていないといつたので、私はちよつと意外に思つた。しかし、この見方については、彼は自分の力では理解することができないということを告白したが、その点では私はまったく同感であつた。——なぜなら、理論上ではどんなに決定的なものであつても、この深淵の雷のような轟きのなかに

あつては、それはまったく不可解なばかげたものときえなつてしまふからである。

「もう渦巻は十分ご覧になつたでしょう」と老人は言つた。「そこでこの岩をまわつて風
のあたりぬ陰へ行き、水の轟きの弱くなるところで、話をしましょう。それをお聞きにな
れば、私がモスケー・ストロムについていくらかは知っているはずだということがおわか
りになるでしょう」

老人の言つた所へ行くと、彼は話しはじめた。

「私と二人の兄弟とはもと、七十トン積みばかりのスクーナー帆式の漁船を一艘そとう持つてい
て、それでいつもモスケーの向うの、ヴァルーに近い島々のあいだで、漁をすることにし
ておりました。すべて海でひどい渦を巻いているところは、やってみる元氣さえあるなら、
時機のよいときにはなかなかいい漁があるものです。が、ロフォーデンの漁師全体のなか
で私ども三人だけが、いま申し上げたようにその島々へ出かけてゆくのを決つた仕事にし
ていた者なのでした。普通の漁場はそれからずっと南の方へ下つたところですよ。そこでは
いつでも大した危険もなく魚がとれるので、誰でもその場所の方へ行きます。だが、この
岩のあいだのえりぬきの場所は、上等な種類の魚がとれるばかりではなく、数もずつとた
くさんなので、私どもはよく、同じ商売の臆おくびょう病な連中が一週間かかつてもかき集める

こののできないくらいの魚を、たった一日でとったものでした。実際、私どもは命がけの投機やま仕事をしていたので——骨を折るかわりに命を賭け、勇気を資本もとてにしていた、というわけですね。

私どもは船を、ここから海岸に沿うて五マイルほど上かみへ行ったところの入江つなに繋いでおきました。そして天気の良い日に十五分間の滞潮よどみを利用して、モスキー・ストロムの本海峡を横ぎつて淵ふちのずっと上手につき進み、渦流うずがよそほどはげしくないオツテルホルムやサンドフレーゼンの近くへ下つて行って、錨いかりを下ろすことにしていました。そこでいつも次の滞潮よどみに近いころまでいて、それから錨を揚げて帰りました。行くにも帰るにも確かな横風がないと決して出かけませんでした、——着くまでは大丈夫やまないと考えるようなやつですね、——そしてこの点では、私どもはめつたに見込み違いをしたことはありませんでした。六年間に二度、まったくの無風のために、一晚じゆう錨を下ろしたままではないければならないことがありました。がそんなことはこの辺ではまったく稀まれなことなのです。それから一度は、私どもが漁場へ着いて間もなく疾風はやてが吹き起つて、帰ることなどは思いもよらないくらいに海峡がひどく大荒れになったために、一週間近くも漁場とどに留まっていなければならなくて、餓死うえじにしようとしたことがありました。あのときは、もし私どもが

あの無数の逆潮流——今日はここにあるかと思うと明日はなくなっているあの逆潮流——の一つのなかへうまく流れこまなかつたとしたら、（なにしろ渦巻が猛烈に荒れて船がぐるぐるまわされるので、とうとう錨をもつらせてそれを引きずつたような有様でしたから）どんなに手をつくしても沖へ押しながされてしまったでしょうが、その逆潮流が私どもをフリーメンの風かざしも下の方へ押し流し、そこで運よく投とうびよう錨かざしもすることができたのでした。

私どもが『漁場で』遭つた難儀は、その二十分の一もお話しできません、——なにしろそこは、天気の良いときでもいやな場所なんです、——だが私どもは、どうにかこうにか、いつも大したこともなくモスケー・ストロムの虎口ここうを通りぬけていました。それでもときどき、滞潮よせみに一分ほど遅れたり早すぎたりしたときには、肝っ玉がひっくり返つたものですよ。またときによると、出帆するとき風が思ったほど強くなって、望みどおりに進むことができず、そのうちに潮流のために船が自由にならなくなるようなこともありました。兄には十八になる息子がいましたし、私にも丈夫な奴やつが二人ありました。この連中がそんなときにいけば、大橈おおかいを漕ぐこのにも、あとで魚をとるときにも、よほど助けになつたでしょうが、どうしたものか、自分たちはそんな冒険をしていても、若い連中をその危険な仕事のなかへひき入れようという気はありませんでした、——なんとと言っても結局、恐

ろしい危険なことでしたからね。

もう五、六日もたてば、私がいまからお話しようとしていることが起つてから、ちょうど三年になります。一八——年の七月十八日のことでした。その日をこの地方の者は決して忘れますまい、——というのは、開闢かいびやく以来吹いたことのないような、実に恐ろしい台風の吹きあれた日ですから。だが午前中いっぱい、それから午後も遅くまで、ずっと穏やかな西南の微風が吹いていて、陽ひが照り輝いていたので、私どものあいだでもいちばん年寄りの経験のある船乗りでさえ、そのあとにつづいて起ることを見とおすことができなかつたくらいです。

私ども三人——二人の兄弟と私——は、午後の二時ごろ例の島の方へ渡つて、間もなく見事な魚をほとんど船いっぱいに積みましたが、その日はそれまでに一度もなかつたほど、たくさんとれたと三人とも話し合いました。いよいよ錨いかりを揚げて帰りかけたのは、私の時計でちょうど七時。ストロムでいちばんの難所よしみを滞潮よしみのときに通りぬけようというのです。それは八時だということが私どもにはわかっているのです。

私どもは右舷うげん後方にさわやかな風を受けて出かけ、しばらくはすばらしい速力で水を切つて進み、危険なことがあるうなどは夢にも思いませんでした。実際そんなことを懸念けねん

する理由は少しもなかったのですから。ところが、たちまち、ヘルゼツゲンの峰越しに吹きおろす風のために、船は裏帆（ヒレ）になってしまいました。こういうことはまったくただならぬ——それまでに私どもの遭ったことのないようなことなので、はつきりなぜということもわかりませんでした。なんとなしに私はちよつと不安を感じはじめました。私どもは船を詰め開き（ヒレ）にしましたが、少しも渦流（うず）を乗り切って進むことができません。私がもとの停泊所へ戻ろうかということを言いだそうとしたそのとたん、艫（とも）の方を見ると、実に驚くべき速さでむくむくと湧き上がる、奇妙な銅色をした雲が、水平線をすっかり蔽（おほ）っているのに気がついたのです。

そのうちにいままで向い風であった風がぱったり落ちて、まったく凪（な）いでしまい、船はあちこちと漂いました。しかしこの状態は、私どもがそれについてなにか考える暇があるほど、長くはつづきませんでした。一分とたたないうちに嵐がおそってきました。——二分とたたないうちに空はすっかり雲で蔽（おほ）われました。——そして、その雲と跳びかかる飛沫（しぶき）のためにはたちまち、船のなかでお互いの姿を見ることができないくらい、あたりが暗くなつてしまいました。

そのとき吹いたような台風のことをお話ししようとするのは愚かなことです。ノルウエ

一じゆうでいちばん年寄りの船乗りだつて、あれほどのには遭つたことはありません。私どもはその台風がすっかりおそつてこないうちに帆索ほつなをゆるめておきましたが、最初の一吹きで、二本の檣マストは鋸のこぎりでひき切つたように折れて海へとばされました。その大メイン檣マストのほうには弟が用心のために体を結えていたのですが、それと一緒にさらわれてしまつたのです。

私どもの船はいままでに水に浮んだ船のなかでもいちばん軽い羽毛はねのようなものでした。それはすっかり平甲板(12)が張つてあり、舳へさきの近くに小さな艙口ハッチが一つあるだけで、この艙口ハッチはメーレストロムを渡ろうとするときには、例の狂い波の海にたいする用心として、しめておくのが習慣になつていました。こうしてなかつたらすぐにも浸水して沈没したでしょう。——というのは、しばらくのあいだは船はまったく水にもぐつていたからです。どうして兄が助かつたのか私にはわかりませんが、確かめる機会もなかつたものですから。私とは異なります、前フオアマスト檣マストの帆索をゆるめるとすぐ、甲板の上にびつたりと腹はらば這はひになつて、両足は舳のせまい上縁うわべりにしつかり踏んぱり、両手では前檣の根もとの近くにある環リング付ゲ螺釘ボルト (13)をつかんでいました。それはたしかに私のできることとしては最上の方法でしたが——こんなふうに私をさせたのは、まったくただ本能でした。——というのは、ひ

どくろうたえていて、ものを考えるなんてことはとてもできなかったのですから。

しばらくのあいだはいま申しましたとおり、船はまったく水につかっていますでしたが、そのあいだ私はずっと息をこらえて螺釘ボルトにしがみついています。それがもう辛抱できなくなると、手はなおもはなさずに、膝ひざをつけて体を上げ、首を水の上へ出しました。やがて私どもの小さな船は、ちょうど犬が水から出てきたときにするように、ぶるぶるっと一ふるいして、海水をいくらか振りおとしました。それから私は、気が遠くなっていたのを取りなおして、意識をはつきりさせてどうしたらいいか考えようとしていたときに、誰かが自分の腕をつかむのを感じました。それは兄だったのです。兄が波にさらわれたものと思いいこんでいたものですから、私の心は喜びで跳びたちました、——が次の瞬間、この喜びはたちまち一変して恐怖となりました、——兄が私の耳もとに口をよせて一こと、『モスケー・ストロムだ!』と叫んだからです。

そのときの私の心持がどんなものだったかは、誰にも決してわかりません。私はまるで猛烈な瘡おこりの発作におそわれたように、頭のとっぺんから足の爪つまさき先まで、がたがた震えました。私には兄がその一ことと言おうとしたことが十分よくわかりました、兄が私に知らせようとしたことがよくわかりました。船にいま吹きつけている風のために、私たちは

ストロムの渦うずまきの方へ押し流されることになっていのです、そしてもうどんなことも私たちを救うことができないのです！

ストロムの海峡を渡るときにはいつでも、たとえどんなに天気の穏やかなときでも、渦巻のずつと上手の方へ行つて、それから滞潮よどみのときを注意深くうかがって待つていなければならぬ、ということはお話ししましたね。——ところがいま、私たちはその淵の方へ、まっしぐらに押し流されているのです、しかも、このような台風のなかを！ 『きつと、私たちはちようど滞潮よどみの時分にあそこへ着くことになろう、——とすると多少は望みがあるわけだ』と私は考えました。——しかし次の瞬間には、少しでも望みなどを夢みるなんてなんとという大馬鹿者おろばかものだろうと自分を呪のろいました。もし私どもの船が九十門の大砲を積載している軍艦の十倍もあつたとしても、もう破滅の運命が決つているのだ、ということがよくわかつたのです。

このころまでには、嵐の最初のはげしさは衰えていました。あるいはたぶん、追風で走つていたのでそんなに強く感じなかつたのかもしれない。がとにかく、いままで風のために平らにおさえつけられて泡立あわだつていた波は、いまではまるで山のようにもり上がってきました。また、空にも不思議な変化が起つていました。あたりはまだやはり、どちらら

一面に真つ黒でしたが、頭上あたりにとつぜん円い雲の切れ目ができて、澄みきった空があらわれました、——これまで見たことのないほど澄みきった、明るく濃い青色の空です、——そして、そこから、私のそれまで一度も見なかったことのないような光を帯びた満月が輝きだしたのです。その月は私どものまわりにあるものをみな、実にはつきりと照らしました、——が、おお、なんとという光景を照らし出したことでしょう！

私はそのとき一、二度、兄に話しかけようと思いました、——がどうしたわけかわかりませんが、やかましい物音が非常に高くて、耳もとで声をかぎりに叫んだのですけれども、一ことも兄に聞えるようにはできませんでした。やがて兄は死人のように真つ蒼な顔をして頭を振り、『聴いてみる！』とでもいうようなふうに、指を一本挙げました。

初めはそれがどういう意味かわかりませんでした、——が間もなく恐ろしい考えが頭に閃きました。私はズボンの時計衣囊かぶしから、時計をひっぱり出しました。それは止っていません。私は月の光でその文字面をちらりと眺め、それからその時計を遠く海の中へ放り投げてわつと泣きだしました。時計はぜんまいが解けてしまつて七時で止つていたのです！私どもは滞潮の時刻に遅れたのです。そして、ストロムの渦巻は荒れくるっている真つ

最中なのです！

船というものは、丈夫にできていて、きちんと手入れがしてあり、積荷が重くなければ、追風に走っているときは、疾風のときの波でもかならず船の下をすべってゆくように思われるものです、——海に慣れない人には非常に不思議に思われることですが、——これは海の言葉では波に乗ると言っていることなのです。で、それまで私どもの船は非常にうまくうねり波に乗ってきたのですが、やがて恐ろしく大きな波がちょうど船尾張出部カウンターの下のところにつつかって、船をぐうつと持ち上げました、——高く——高く——天にもとどかんばかりに。波というものがあんなに高く上がるものだということは、それまでは信じようとしたって信じられなかったでしょう。それから今度は下の方へ傾き、すべり、ずつと落ちるので、ちょうど夢のなかで高い山の頂上から落ちるときのように気持が悪く眩暈めまいがしました。しかし船が高く上がったときに、私はあたりをちらりと一目見渡しました、——その一目だけで十分でした。私は一瞬間で自分たちの正確な位置を見てとりました。モスケー・ストロムの渦巻は真正面の四分の一マイルばかりのところにあるのです、——が、あなたがいまご覧になった渦巻が水車をまわす流れと違っているくらい、毎日のモスケー・ストロムとはまるで違っているのです。もし私がどこにいるのか、そしてどうなるのか、ということを知らなかつたら、その場所がどんなところかぜんぜんわからなかつたことで

しよう。ところが知っていたものですから、恐ろしさのために私は思わず眼を閉じました。眼瞼が痙攣でも起したように、ぴったりとくつついたのです。

それから二分とたたないところに、急に波が鎮まったような気がして、一面に泡に包まれました。

船は左舷へぐいとなかばまわり、それからその新たな方向へ電のようにつき進みました。同時に水の轟く音は、鋭い叫び声のような——ちょうど幾千という蒸気釜がその放水管から一時に蒸気を出したと思われるような——物音にまったく消されてしまいました。船はいま、渦巻のまわりにはいつもあるあの寄波の帯のなかにいるのです。そして無論次の瞬間には深淵のなかへつきこまれるのだ、と私は考えました、——その深淵の下の方は、驚くべき速さで船が走っているのではんやりとしか見えませんでした。しかし船は少しも水のなかへ沈みそうではなく、気泡のように波の上を掠り飛ぶように思われるのです。その右舷は渦巻に近く、左舷にはいま通ってきた大海原がもり上がっていました。それは私たちと水平線とのあいだに、巨大な、のたうちまわる壁のようにそびえ立っているのです。

奇妙なように思われるでしょうが、こうしていよいよ渦巻の顎に呑まれかかりますと、

渦巻にただ近づいているときよりもかえって気が落ちつくのを感じました。もう助かる望みがないと心を決めてしまったので、初め私の元気をすっかり失くした、あの恐怖の念が大部分なくなつたのです。絶望が神経を張り締めてくれたのでしようかね。

空威張りするよう^{からいば}に見えるかも

——が、まったくほんとうの話なんです、

——私は、こうして死ぬのはなんとというすばらしいことだろう、そして、神さまの御力^{みちから}のこんな驚くべき示顕^{しげん}のことを思うと、自分一個の生命^{いのち}などという取るにも足らぬことを考えるのはなんと**いうば**かげたことだろう、と考えはじめました。この考えが心に浮んだとき、たしか恥ずかしさで顔を赧^{あか}らめたと思います。しばらくたつと、渦巻そのものについての鋭い好奇心が強く心のなかに起つてきました。私は、自分の生命を犠牲にしようとも、その底を探つてみたいという願いをはつきりと感じました。ただ私のいちばん大きな悲しみは、陸^{おか}にいる古くからの仲間たちに、これから自分の見る神秘を話してやることができまい、ということでした。こういう考えは、こんな危急な境遇にある人間の心に起るものとしては、たしかに奇妙な考えです。——そしてその後よく考えることですが、船が淵のまわりをぐるぐるまわるので、私は少々頭が変になつていたのではなからうかと思ひますよ。

心の落着きを取りもどすようになった事情はもう一つありました。それは風のやんだことです。風は私どもがいるところまで吹いて来ることができないのです、——というわけは、さつきご覧になったとおり、寄波よせなみの帯は海面よりかなり低いので、その海面は今では高く黒い山の背のようになって私どもの上にそびえていたのですから。もしあなたが海でひどい疾風にお遭いになったことがないなら、あの風と飛沫しぶきとが一緒になってどんなに人の心をかき乱すものかということとは、とてもご想像ができません。あれにやられると目が見えなくなり、耳も聞えず、首が締められるようになり、なにかしたり考えたりする力がまるでなくなるものです。しかし私どもはいまではもう、そのような苦しみをよほどまぬかれていました。——ちようど牢獄ろうごくにいる死刑を宣告された重罪人が、判決のまだ定まらないあいだは禁じられていた多少の寛大な待遇を許される、といったようなものですね。

この寄波の帯を何回ほどまわったかということとはわかりません。流れるというよりむしろ飛ぶように、だんだんに波の真ん中へより、それからまたその恐ろしい内側の縁のところへだんだん近づきながら、たぶん一時間も、ぐるぐると走りまわりました。このあいだじゆうずつと、私は決して環リング付螺釘ボルトを放しませんでした。兄は艫ともの方において、船尾張

出部の籠かごの下にしつかり結びつけてあった、小さな空からになった水樽みずたるにつかまっています。それは甲板にあるもので疾風が最初におそってきたとき海のなかへ吹きとばされなかつたただ一つの物です。船が深淵の縁へ近づいてきたとき、兄はつかまっていたその樽から手を放し、環リングのほうへやってきて、恐怖のあまりに私の手を環リングからひき放そうとしました。その環リングは二人とも安全につかまっていられるくらい大きくはないのです。私は兄がこんなことをしようとするのを見たときほど悲しい思いをしたことはありません、——兄はそのとき正気を失っていたのだ——あまりの恐ろしさのため乱暴な狂人になっていたのだ、とは承知していましたが。しかし私はその場所を兄と争おうとは思いませんでした。私ども二人のどちらがつかまったところでなんの違ちがいもないことを知っていましたので、私は兄に螺釘を持たせて、艦の樽の方へ行きました。そうするのはべつに大してむずかしいことではありませんでした。というのは船は非常にしつかりと、そして水平になったまま、ぐるぐる飛ぶようにまわっていて、ただ渦巻がはげしくうねり湧わき立っているために前後に揺れるだけでしたから。その新しい位置にうまく落ちついたかと思うとすぐ、船は右舷の方へぐつと傾き、深淵をめがけてまっしぐらに突き進みました。私はあわただしい神さまへの祈りを口にし、もういよいよおしまいだなと思いました。

胸が悪くなるようにすうつと下へ落ちてゆくのを感じたとき、私は本能的に樽につかま
っている手を固くし、眼を閉じました。何秒かというものは思いきって眼をあけることが
できなくて——いま死ぬかいま死ぬかと待ちかまえながら、まだ水のなかで断末魔のものが
きをやらないのを不審に思っていました。しかし時は刻々とたつてゆきます。私はやはり
生きているのです。落ちてゆく感じがやみました。そして船の運動は泡の帯のところにい
たときと同じようになつたように思われました。ただ違うのは船が前よりもいつそう傾い
ていることだけです。私は勇気を出して、もう一度あたりの有様を見わたしました。

自分のまわりを眺めたときのあの、畏懼と、恐怖と、嘆美との感じを、私は決して忘れ
ることはありませんまい。船は円周の広々とした、深さも巨大な、漏斗の内側の表面に、
まるで魔法にでもかかったように、なかほどにかかっているように見え、その漏斗のまっ
たくなめらかな面は、眼が眩むほどぐるぐるまわっていないかかったなら、そしてまた、満月
の光を反射して閃くもの凄^{すし}い輝きを発していなかったら、黒檀とも見まがうほどでした。
そして月の光は、さつきお話ししました雲のあいだの円い切れ目から、黒い水の壁に沿う
て漲りあふれる金色の輝きとなつて流れ出し、ずっと下の深淵のいちばん深い奥底まで
も射しているのです。

初めはあまり心が乱れていたもので、なにも正確に眼にとめることはできませんでした。とつぜん眼の前にあらわれた恐るべき荘厳が私の見たすべてでした。しかし、いくら心が落ちついたとき、私の視線は本能的に下の方へ向きました。船が淵ふちの傾斜した表面にかかっているのです、その方向はなんのさえぎるものもなく見えるのです。船はまったく水平になっていました、——というのは、船の甲板が水面と平行になっていた、ということですから、——がその水面が四十五度以上の角度で傾斜しているのです、私どもは横ざまになっているのです。しかしこんな位置にありながら、まったく平らな面にいると同じように、手がかりや足がかりを保っているのがむずかしくなくことに、気がつかずにはいられませんでした。これは船の回転している速さのためであつたらうと思えます。

月の光は深い渦巻の底までも射しているようでした。しかしそれでも、そのあらゆるものを立ちこめている濃い霧のために、なにもはつきりと見分けることができずしてました。その霧の上には、マホメツト教徒が現世から永劫えいごうの国へゆく唯一ゆいいつの通路だというあのせまいゆらゆらする橋(14)のような、壮麗な虹にじがかかっていました。この霧あるいは飛沫は、疑いもなく漏斗の大きな水壁が底で合つて互いに衝突するために生ずるものでした。——がその霧のなから天に向つて湧き上がる大叫喚は、お話ししようとしたって、

とてもできるものではありません。

上の方の泡の帯のところから最初に深淵のなかへすべりこんだときは、斜面をよほど下の方へ降りましたが、それからのちはその割合では降りてゆきませんでした。ぐるぐるまわりながら船は走ります、——が一樣な速さではなく——目まぐるしく揺れたり跳び上がったりにして、あるときはたつた二、三百ヤード——またあるときは渦巻の周囲をほとんど完全に一周したりします。一回転ごとに船が下に降りてゆくのは、急ではありませんでしたが、はつきりと感じられました。

こうして船の運ばれてゆくこの広々とした流れる黒檀の上で、自分のまわりを見渡していますと、渦に巻きこまれるのが私どもの船だけではないことに気がつきました。上の方にも下の方にも、船の破片や、建築用材の大きな塊や、樹木の幹や、そのほか家具の破片や、こわれた箱や、樽や、桶おけ板いたなどの小さなものが、たくさん見えるのです。私は前に、不自然なくらいの好奇心が最初の恐怖の念にとつてかわっていたことを申しましたね。その好奇心は恐ろしい破壊にだんだんに近づくにつれて、いよいよ増してくるのです。私は奇妙な関心をもって、私どもと仲間になつて流れている無数のものを見まもりはじめました。どうも気が変になつていたにちがいありません、——そのいろいろのものが下の泡の

方へ降りてゆく速さを比較することに興味を求めさえしていたのですから。ふと気がつく
とあるときはこんなことを言っているのです。『きつとあの樅もみの木が今度、あの恐ろしい
底へ跳びこんで見えなくなるだろうな』——ところが、オランダ商船の難破したのがそれ
を追い越して先に沈んでしまったので、がっかりしました。このような種類の推測を何べ
んもやり、そしてみんな間違つたあげく、この事実——私がかならず見込み違いをしたと
いうその事実——が私にある一つながりの考えを思いつかせ、そのために手足はふたたび
ぶるぶる震え、心臓はもう一度どきんどきんと強く打ちました。

このように私の心を動かしたのは新たな恐怖ではなくて前よりもいつそう心を奮いたた
せる希望の光が射してきたことなのです。この希望は、一部分は過去の記憶から、また一
部分は現在の観察から、生れてきたのでした。私は、モスケー・ストロムに呑みこまれ、
それからまた投げ出されてロフオーデンの海岸に撒まき散らされた、いろいろな漂流物を思
い浮べました。そのなかの大部分のものは、実にひどく打ち砕かれていました、——刺とげが
いっぱいにつきたつているように見えるくらい、擦すりむかれてざらざらになっていました、
——が私はまた、そのなかには少しもいたんでいないものもあつたことを、はつきり思い
出しました。そこでこの相違は、ざらざらになつた破片だけが完全に呑みこまれたもので

あり、その他のものは潮時を大分遅れて渦巻に入ったか、あるいはなにかの理由で入ってからゆつくりと降りたために、底にまで達しないうちに満潮あるいは干潮の変り目が来てしまったのだ、と思うよりほかに説明ができませんでした。どちらにしる、これらのものが早い時刻に巻きこまれたり、あるいは急速に吸いこまれたりしたものの運命に遭わずに、こうしてふたたび大洋の表面に巻き上げられることはありそうだ、と考えました。私はまた三つの重要な観察をしました。第一は、一般に物体が大きければ大きいほど、下へ降りる速度が速いこと、——第二は、球形のものとその他の形のものとは、同じ大きさでも、下降の速度は球形のものが大であること、第三は、円筒形のものとその他の形のものとは、同じ大きさでも、円筒形がずっと遅く吸いこまれてゆくということです。私は助かってから、このことについて、この地方の学校の年寄りの先生となども話したことがあります。『円筒形』だの『球形』だのという言葉を使うことはその先生から教わったのです。その先生は、私の観察したことが実際水に浮いている破片の形からくる自然の結果だということの説明してくれました、——その説明は忘れてしまいました、——そしてまた、どういうわけで渦巻のなかを走っている円筒形のもが、他のすべての形をした同じ容積の物体よりも、渦巻の吸引力に強く抵抗し、それらよりも引きこまれにくいかという

ことを、私に聞かせてくれたのです(15)。

このような観察を裏づけ、さらにそれを実地に利用したいと私に思わせた、驚くべき事実が一つありました。それは、渦巻をぐるぐるまわるたびに船は樽やそのほか船の帆桁やマストマストのようなもの、のそばを通るのですが、そういうような多くのものが、私が初めてこの渦巻の不思議な眺めに眼を開いたときには同じ高さにあったのが、いまではずっと私どもの上の方にあり、もとの位置からちよつとしか動いていないらしい、ということなのです。

もう私はなすべきことをためらつてはいませんでした。現につかまっている水樽にしっかりと身を結びつけ、それを船尾張出部から切りはなして、水のなかへ跳びこもうと心を決めたのです。私は合図をして兄の注意をひき、側そばに流れてきた樽を指さし、私のしようとして、いることをわからせるために自分の力でできるかぎりのことをしました。とうとう兄には私の計画がわかったものと思われました、——がほんとにわかったのか、それともわからなかったのか、兄は絶望的に首を振り、環リング付螺釘ボルトにつかまっている自分の位置から離れることを承知しないのです。兄の心を動かすことはできないことですし、それに危急のさいで一刻もぐずぐずしてはられないので、私はつらい思いをしながら、兄を彼の運命にまかせ、船尾張出部に結びつけてあった縛しばり索なわで体を樽にしっかりと縛り、そのうえ

もう一刻もためらわずに樽とともに海のなかへ跳びこみました。

その結果はまさに私の望んでいたとおりでした。いまこの話をしてるのが私自身ですし——私が無事に助かつてしまったことはご覧のとおりですし——また助かった方法ももうはやご承知で、このうえ私の言おうとすることはみんなおわかりのことでしょうから、話を急いで切りあげましょう。私が船をとび出してから一時間ばかりもたったころ、船は私よりずっと下の方へ降りてから、三、四回つづけざまに猛烈な回転をして、愛する兄を乗せたまま、下の混沌こんとんとした湧きたつ泡あわのなかへ、永久にまっさかさまに落ちこんでしまいました。私のからだを縛りつけた樽が、渦巻の底と、船から跳びこんだところとの、中間くらいのところまで沈んだところに、渦巻の様子に大きな変化が起りました。広大な漏斗の側面の傾斜が、刻一刻とだんだん峻けわしくなくなってきました。渦巻の回転もだんだん勢いが弱くなります。やがて泡や虹が消え、渦巻の底がゆるゆると高まってくるように思われました。空は晴れ、風はとつくに落ち、満月は輝きながら西の方へ沈みかけていました。そして私は、ロフオーデンの海岸のすっかり見える、モスケー・ストロムの淵がさつきまであったところの上手の、大洋の表面に浮び上がっているのです。滞潮よしみの時刻なのです、——が海はまだ台風の名残りや山のような波を揚げていました。私はストロムの海峡のな

かへ猛烈に巻きこまれ、海岸に沿うて数分のうちに漁師たちの『漁場』へ押し流されました。そこで一艘そうの船が私を拾いあげてくれました、——疲労のためにぐったりと弱りはている、そして（もう危険がなくなつたとすると）その恐ろしさの思い出のために口もきけなくなっている私を。船にひきあげてくれた人たちは、古くからの仲間や、毎日顔を合あわせている連中でした、——が、ちょうどあの世からやってきた人間のように誰ひとり私を見分けることができませんでした。その前の日までは鴉からすのように真つ黒だつた髪の毛は、ご覧のとおりになくなつていました。みんなは私の顔つきまですっかり變つてしまつたといひます。私はみんなにこの話をしました、——が誰もほんとうにしませんでした。今それをあなたにお話ししたのですが、——人の言うことを茶化してしまふあのロフオーデンの漁師たち以上に、あなたがそれを信じてくださるうとは、どうも私にはあまり思えないんですがね」

(1) 「暗黒の海」——昔、地中海沿岸の住民に知られない外海（大西洋）のことをかく言つたのであるという。——前の「ヌビアの地理学者」というのは誰のこ

とか、はっきりわかっていない。ポーの晩年の論文『ユウレカ』のなかには、「ヌビアの地理学者 Ptolemy Hephestion によって記述された暗黒の海」うんぬん云々とあるが、これはポーの思い違いであるらしく、おそらくアレクサンドリアの天文地理学者 Claudius Ptolemy ではなからうかと言われている。

(2) 強風のときに船が海上で安全のため、帆を低く下げあるいは絞って、できるかぎり風の方へ船首を向け、ほとんど静止していること。

(3) *chopping* —— 強い潮流の方向と反対に風が吹くとき、あるいは二つの潮流が合するときなどに生ずるように、波が短く不規則に乱れたように立ち騒ぐこと。かりに「狂い波」と訳しておいた。

(4) [*Maelstrom*] —— ノルウエー北部の海岸にある有名な大旋渦だいせんか。モスケン (モスケー) ・ストロムとも呼ばれる。原語読みならばメールシトルムとでも書くべきであるが、ここでは英語読みにした。前のノルドランド (ノルラン) 以下の固有名詞も必ずしも原語読みにしたがわず、便宜上の読み方を用いた。島の名などは多く作者の創作にかかるものらしい。

(5) Jonas Rannus (一六四九—一七一八) —— ノルウエーの僧侶そうりよ。ノルウエーの

地理および歴史に関する著述がある。

- (6) ギリシャ神話の冥府めいふにある燃ゆる炎の河。
- (7) アイスランドの東南、スコットランドの北方の洋上にある諸島。
- (8) Athanasius Kircher (一六〇一—一八〇) ——ドイツの数学、言語学、考古学の学者。
- (9) バルチック海の北方の海。
- (10) 向い風のために帆がマストに吹きつけられること。
- (11) できるだけ風の来る方に近く帆走し上がる事。
- (12) 船首から船尾にいたるまですつかり平坦へいたんに張られた上甲板。通し甲板。
- (13) ring-bolt ——綱などを結びつけるために甲板に取り付けられた環かんのついた螺釘ねじく。環釘。
- (14) マホメット教徒の信ずるところによれば、現世から天国へ至るには蜘蛛くもの糸よりも細い橋を渡るのである。その橋を渡るときに罪ある者は地獄の深淵しんえんに落ちるといふ。
- (15) アルキメデス 『De Incidentibus in Fluido』 第二巻を見よ。(原注)

青空文庫情報

底本：「黒猫・黄金虫」新潮文庫、新潮社

1951（昭和26）年8月15日発行

1995（平成7）年10月15日89刷改版

2004（平成16）年2月5日100刷

入力：kompass

校正：土屋隆

2005年11月1日作成

2014年3月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

メールストロムの旋渦

A DESCENT INTO THE MAELSTROM

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 エドガー・アラン・ポー Edgar Allan Poe
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks
青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>